2020年9月号179号

しゃきょう 社協だより

●発行 社会福祉法人三宅島社会福祉協議会 〒100-1211 三宅島三宅村坪田3053 電話04994-8-5888

自宅でできるボランティア活動

～公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会「絵本を届ける運動」～

Q「絵本を届ける運動」っていったい何？？

A 公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会が行っている活動で、みなさんに、現地の言葉に翻訳したシールを日本の絵本に貼って頂き、その絵本をアジアの子どもたちに届ける運動です。

Q なぜ絵本を届けるの？

A アジアにはまだ「本を知らない子どもたち」がたくさんいます。本を知らないという事は教育を受ける機会がないということです。教育を受ける事ができないと、安定した仕事に就けず貧困から抜け出すことができないのです。

絵本を届ける運動

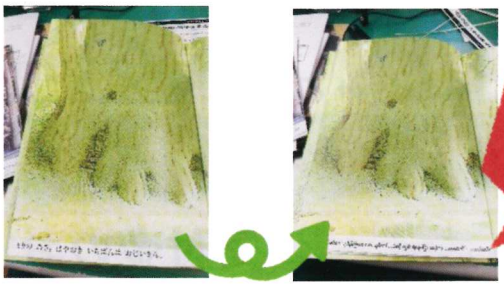
やってみよう！

① 「絵本を届ける運動」で検索か、電話で問い合わせする！
② 「届け先」と「絵本を」選択する！
③ 参加費2,500円を支払う！
④ 届いた絵本に翻訳シールを貼る！
⑤ 絵本を返送する！

※参加費2,500円には絵本代、シール材料費・印刷費、輸送料、活動に必要な経費などが含まれます。
※「届け先」は「ミャンマー」「ラオス」「カンボジア」「アフガニスタン」などがあります。

絵本セットがこんな感じで届きます！

絵本：14ひきのあさごはん（童心社）



こんな風に翻訳シールを貼っていきます！

自宅にいる時間を利用してボランティア活動を行うのはどうでしょうか？
ご家族と一緒に…親子で…お友だちと…もちろんひとりでも…
「絵本を届ける運動」は心がほっこりするようなボランティア活動でした。

問合せ先：公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会「絵本を届ける運動」
電話 03-6457-4585（絵本を届ける運動 担当）

障がい福祉　いぶきだより

開所日時：月・水・木（10:00～15:00）

三宅村地域活動支援センター「いぶき」は障がいのある方の働く作業場と楽しく過ごせる場所です！

９月のいぶき活動

緑花活動　２・９・16・23・30日（全水曜日）

外出支援　17日（木曜日）

７月、七夕行事を行いました。飾りをたくさん作り、短冊に願い事を書き、立派な笹に一人ひとり飾りつけをしました。「コロナが終わりますように」「みんなと島外学習に行けますように」など、皆さん各々の願いを込めて飾っていました。また、七夕レクリエーションも行い、チーム対抗戦では白熱した対決となりました。

ちけん通信

Vol.17　上京や入院の時どうしたらいい？

Q.

私は一人暮らしですが、上京・入院などをした場合、財産を誰かに盗まれたりしないか心配です。「ちけん」で何とかしてくれますか？

地権担当のヤナガワです。ご相談ありがとうございます！家から離れるときの貴重品の管理はとても心配ですよね。もしなくなってしまったら…と考えると、とても不安になるかと思います。「ちけん」事業では日々の困りごとや様々な手続き、お金についての相談だけでなく、貴重品の保管についての相談も承っています！安心して日々の生活ができるようにお手伝いさせてもらいますので、お気軽にご相談ください！

そうだ！社協の地権に相談してみよう！

「地権（ちけん）」では、判断能力に心配がある方を対象として、福祉サービスの利用に関する相談に応じ、助言や情報提供を行う事で本人による選択や契約を支援する事業です。

上記のような心配ごとや不安ごとがございましたら三宅島社協地権担当：柳川（やながわ）【直通 8-5883】まで！

寄付金のお知らせ

下記の方から三宅島社会福祉協議会へご寄付頂きましたのでご報告いたします。

池田　清さまより	亡姉　睦美さまの香料より	訪問介護・権利擁護事業のために
土屋　景以子さまより	亡父　好孝さまの香料より	組織運営事業のために
井上　克美さまより	亡弟　忠志さまの香料より	障がい者福祉事業のために
山田　廣年さまより	亡母　関口　芳枝さまの香料より	権利擁護事業のために

福祉振興のため、大切に使わせて頂きます。ご厚志誠にありがとうございます。

「　こんにちは　何もないけど　顔を見に　」

三宅島民生児童委員 協議会

これは島しょのある研修会での時のこと、講師の先生が「民生委員・児童委員の活動を読み込んだ標語を作ってください。」と提案されました。この標語は多くの賛同を得て選ばれました。委員の気持ちを端的に表していたからでしょう。中7文字が温かく胸に響きました。委員みんなの気持ちだったからです。このような気持ちを常に持って活動していれば、委員と住民の方々との結びつきはより深いものとなっていくでしょう。

今年度は当初から新型コロナウィルス感染症流行拡大に伴い、普段の活動にも大きな制約を受けました。現在までは幸いなことに三宅島の住民から、感染症の方は出ておりませんが三宅島の状況は大変厳しいものがあります。今まで以上に気を引き締めて、みんなでこの難局を乗り越えていきたいものです。委員もできるだけの対応を図ってまいりますので、ご相談・ご連絡をお待ちしております。　（文責：高松）

（この標語は、主任児童委員の穴原甲一郎さんの作品です。）

コロナにも負けず…【パネル展示】

例年、活動啓発PRの場として三宅村役場1階ロビーをお借りし、パネル展示を行ってきました。今年は新型コロナウィルス感染症拡大により、日程をずらして7月7日（火）～13日（月）の土日を除いた5日間で行う事になりました。その上、普及啓発パレードや支庁研修・島外施設の研修等の一連の行事が中止となってしまい、満足なパネルを用意することができませんでした。これまでの活動を主体にしての展示でしたが、昨年度来られなかった方のおいでもあって良かったと思います。ご来場いただいたみなさん、ありがとうございました！

三宅島民生児童委員協議会事務局
東京都三宅支庁総務課内
☎04994-2-1311

【伊豆地区担当民生委員】
山本　登美子　☎2-0033
加藤　民子　☎2-0228

【伊ヶ谷地区担当民生委員】
長谷川　利恵美　☎2-1163
高松　英夫　☎2-0383

【阿古地区担当民生委員】
福本　有紀子　☎080-8491-6067
浅沼　多津子　IP5-5766

【神着地区担当民生委員】
森下　久美子　☎2-0988

【主任児童委員】
穴原　甲一郎　☎2-1239

【坪田地区担当民生委員】
北村　友基　☎8-5826
寺澤　百合子　☎6-1007

ご相談はお近くの民生児童委員へ、お気軽にどうぞ！

懐かしのマイ・ストーリー

もう一度、あなただけの物語、聞かせてください。

林田綾子さんの物語

今月号のマイストーリーは以前社協だよりに掲載させていただいたバックナンバーのマイストーリーを掲載させていただきます。当時の社協だよりはまだカラーではなかったので当時の素敵な写真もあわせてご覧ください。

あの夏、長崎のこと。この夏、長崎のこと。

現在の林田さん

昭和８年長崎県長崎市で生まれた林田綾子さん８４歳。ひとりっ子だったので父や母、親戚からもとても可愛がられて、大切に大切に育てられた。12歳の夏が来た。あの夏はとても暑かった。朝から空襲警報が鳴っていたが解除されたので飛行機の燃料にするための松ヤニを採取しなければならず、友達を誘いに行った。友達の小さな弟がはしゃいで迎えてくれた。友だちが出てくるまでふたりで縁側に座っていた。飛行機の音がしたので空を見上げた。「日本の飛行機かな。アメリカの飛行機かな。」

太陽がとてもまぶしかった…昭和２０年８月９日午前１１時０２分、長崎県長崎市に原子爆弾が投下された。林田さんの住む町は爆心地から２キロ程度しか離れていなかった。太陽よりまぶしい何かが光った。思わず目を閉じた。目を開けたら、目に映るものすべてが変わっていた。友達の家に爆弾が落ちたと思った。防空壕から「綾子ちゃん、家の人を呼んでくるからここで待ってろ」と言われたが、じっとしていられなかった。じっとしているのが怖かった。とにかく走った。町は地獄だった。焼ける匂いと、血の匂いと、自分に助けを求める死にゆく人の声、１２歳の林田さんは町を駆け抜けた。「綾子！」父の声だった。父が私を抱きしめ、町の防空壕まで走った。父の顔を見たら我に返った。安心したら、自分の右側のほほに痛みを感じた。爆風で右の顔半分がやけただれて、薄皮がむけていた。町の防空壕で避難していると、赤ちゃんを抱いているおじさんがいた。よく見てみると、おじさんは赤ちゃんなんか連れていなかった。自分の内臓を両手いっぱいに抱えていた。原爆投下の際に負傷したのだろう。間もなくおじさんは亡くなった。その時の防空壕の血の匂いを忘れられないという。そのあと、家族で母の実家のある島原へ行った。多くの人が行列を作り長崎市から離れた。長崎市から離れても、あの夏の長崎のことを決して忘れなかった。私は林田さんと話すのが大好きです。他愛もない話をふたりでゲラゲラ笑いながら話す時間が大好きです。普段は可愛らしく、ユーモラスで本当に素敵な女性です。今回の取材も快く受けて頂き本当に感謝しています。今までたくさん色々な話をしてきたけれど、この話を聞くのは初めてでした。「夏が来ると、やっぱり思い出すのね。」と林田さんは優しく話してくれました。あの夏、１２歳だった林田さんは、この夏、８月１５日にあの場所、長崎を訪問した。林田さんの願いは「この夏の長崎もどうか平和で…。できれば、どんな場所もどうか平和で…。」だ。綾子さん、貴重な経験をお話してくれてありがとうございました。私、この景色を絶対忘れません。どうか、平和で…。（取材日：平成30年8月10日）

平成30年当時の林田さん

平和の大切さや平和であることの幸せを教えてくれるようなマイストーリーでした。原子爆弾投下から今年で75年が経ったとテレビで報道されていました。何年経ってもこの心の傷を癒す薬や治療法はなく、多くの人が心に癒えぬ傷を抱えながら75年間過ごしてきたのだと思います。私は２年前の取材以降、暑い夏の真っ青な空を見上げるたびに、あの日もこんな空の日だったのかな…と思います。75年前のあの夏の長崎の原子爆弾投下が、人類史上最後の原子爆弾投下であって欲しいと思います。この夏も次の夏もそのまた次の夏も、この先の夏が、いや、どんな季節も、どんな時も、どんな場所も…どうか平和で…。